

發揮躍動し居るの感あつて、斯界のため欣快に堪へない。なほ、淨瑠璃人形芝居と呼稱を一定したる如き或は人形出遣ひに制限を加へたるなど正に新體制と云ふべく、今後徒らに素義と接近せざらんことを望み、更に師の藝術に鎧草の絢爛を期待し、最後に心から其の健康長壽を禱る。

○

高 安 吸 江

古靱氏の淨瑠璃は専ら合理的な心理描寫に最善の努力を拂はれ一字一句を忽せにせず終始一貫緊張そのものであるから聽手はいつもその強い力にグン／＼と引きつけられ一段がすむと非常に疲勞を覺えて苦しい事があります。

此間の鰻谷などそのせぬか陰慘味があまり強過ぎ不快をさへ感じた位でした。

それで一段の中にどこか呼吸をやすめる個所があつてスーとした快い氣持になることが出来たら、そこに寛嚴よろしきを得て初めて完璧なものが出来上ると思ひます。

○

太 宰 施 門

新態勢の文樂とその槽下古靱師に望むべきことは非常に多

い。ゆるゆるとは別の機會に述べることにして、ここでは簡単に二つ三つ。

氣長く遠い將來を見て事のまとまるやう、枝が花をつけ實を結ぶやう努力していただきたい。現勢への不満は右翼側も左翼の陣も、ともに聲を一にしてゐるが、何うそれを聽いて解決するかは仲々の大仕事である。大夫も三味線も人形も、またその背後周囲の人も色いろの機關も、力を合せてなすべきこと、また勸説すべきことは目今のところ唯だ一つしか無いやうに思はれる。すなはち勉強することである。反省することである。さうして謙虛の心を忘れないで人に糺し、異論があれば十分述べて自分も妄を直し、また對手を啓蒙する。その手段を今の雑誌、「淨瑠璃雜誌」の上に見出すのも一つの良い方法であるやうに思はれる。

廣く言つてそれは研究を深めること、教育の振興である。

さうした方向に眞じめさが減つたとか、眞剣味が無くなつたとかいふ一部の批評を前に私は聞いた。それは三味線の誰がひどいとか、ある大夫の藝は何だとか、某人形の扱ひが無茶だとかといふ、個々のものに寄せられる糾弾より、何れくらゐ文樂にとつて不吉の前徴であるか分らない。それが全部嘘であるやうに、或ひはただ一部のことであるやうに私は希望する。

もとより現在の狀態を一段よい階位に進めるためには、何う考へても十年も二十年の月日が要りようである。初心の人

人を熱心にみちびき教へ、焦らないでただ將來の櫓を守る、立派な人達につくり上げるやう、各部の首腦者達は肝膽を碎いてもらひたい。早くものになり、一寸さわがれ、それで得意になるやうな可い加減な仕上げはだんぜん禁物である。

諸師匠の苦心が判然形に現はれて、私達を満足さすやうになつた時、その頃まで私が長命するか何うかは誰にも分らない。それまでの所は實は、一方さへうまく行つて居れば一切申し分は無いのであるが、慾を言へば矢張り私達をも少しはよろこばして頂きたい。それは櫓下の演奏を必ず榮三主役の人形で飾ることである。榮三師の實に見事な女形、若衆、二枚目などを、古靱師の語り物で見せてもらふことである。これは是非實現して、模範のもの、我が國で今日見られる最首位のものはここにあるといふ誇りを、文樂へ、その藝術、その長い歴史へ添へるやうに運ばれたい。

それから一段一時間ぐらゐの曲を、少くも三つは毎興行出してもらひたい。人数はあるのだから前々から準備させて、代るがはるやるやうに。とても聞いて居られないやうなら落伍させる。さうして數年の間に、櫓下につづく二人の「一人前の大夫」をこしらへる。三つは斯うしたちやんとした語り物が無いやうだと、嚴密に言つて「我が文樂」なるものは存在してゐないと同じである。もとより我々は一段だけよいのを聞けば満足なのだから、この二つは先づ何れくらゐ悪くてもよいのであるが、悪いよりは可なりの方が宜い。可なりよ

りむろんよい方がよい譯である。中堅どこの勉強にもなつて一舉兩得と言つた筋になるのではなからうか。

古靱大夫の語り物としては、その傑作中の傑作と折紙の附いたもの、それを先づ出して、その次は同師の研究物、初役でもすつかり改められたものでもよい、それを出し物にする少くも交互に列べる。あるひは一興行中に、出来るなら二つを聞かせる。ほんたうを言つて世間の人は誰も、まだ古靱大夫の眞價をよく知つて居らず、私達とてその方の卒業へはまだ餘程の距離があるのだから、座の人がみなうんと勉強するやうに私達も負けずに一生懸命やつて見たい。あへて新方法を提唱するゆゑんである。(完)

○

中 野 孝 一

古靱大夫が津大夫のあとをうけて文樂座の櫓下に推され、來初春興行にその披露をやる事になつたそうである。これは當然過ぎる筋道の落ちつきで、本人にしても格別榮進とも思つてゐまいし、それにこの人はかつてこの櫓下問題には祟られた人である。ほろにがい不快な想ひ出のまつはる櫓下に今更らならされたとして、傍から騒ぐほどそう單純なよろこびに浸り得られないといふのがかけねのない本音であるかもしれ